は、人が亡くなることが多かったけど、悲観的な気持ちはありませんでした。

「旅立ちの時に、私の勤務を選んでくれた。」

素直にそう思えるようになっていたのです。それからは、誰かが亡くなるときにも、感謝にも似たような気持ちが芽生えるようになりました。

看護師という仕事は、人の死に関わる職業です。死を意識する状況だからこそ、生きるということも真剣に考える機会を与えられるのだと思います。

新人看護師だったころから30年以上の時が過ぎ、両親を見送って、自分の人生の最期についても、考えるようになってきました。人生の締めくくりの大切な瞬間を、どのような環境で過ごすのだろうと思いながら、残された人生を、精一杯生きていきたいと、改めて感じるのです。

優秀賞

蛭田 えみ さん

この度は、優秀賞をいただき、とても嬉しく思っています。ありがとうございます。選考委員の皆様、関係者の方々に、厚く御礼申し上げます。

このエピソードは、看護師人生の中でも、インパクトが大きな経験でした。まだ経験年数が少なく、死生観も確立していない中、たくさんの方をお見送りするということは、辛いとか、悲しいということだけではなく、「生きるとは何か？」ということを、深く考える経験だったと思っています。

亡くなられた後の処置や段取りに慣れていく自分への嫌悪感や、何とも言えない無力感が付きまとっていました。この経験がなかったら、私はもっと早くに、総合病院の看護師をやめていたと思います。

最近は、高齢の実母、義母を相次いで見送り、私自身も人生後半になりました。年齢を重ねれば、死生観も確立し、迷いもなくなると思っていましたが、まだまだ、迷うことも多く、未熟であると感じる日々です。人はいつか最期の時を迎えます。だからこそ、今日1日を悔いがないように、生きていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

選考委員特別賞

車椅子の看護師 ～高尾山のある町での育みあい～

櫛田 美知子 さん

横浜みなとみらいの海風に吹かれながら、無性にあの町の人々に会いたくなる。横浜に来て三年。みんな元気かな？どうしているかな？コロナでも大丈夫よね、心繋がっているから。町の名は「高尾山のある八王子市浅川地区」。事故で突然車椅子生活になり、仕事のために故郷岐阜を捨て、上京した私にとっては第二の故郷、八王子。そこで私は、「地域包括支援センター高尾」で看護師として五年ちょっと働いていた。高齢者の相談業務や介護予防などを担当した、「車椅子の看護師」である。

手動装置付きの車や車椅子で地域に日々出て行った。もちろん町は道路や建物など不便なこともあったが、出ていくのが楽しかった。いろいろな出会いやコミュニケーションがあった。私の仕事はチーム力、地域力が大切だった。医療・介護・地域の連携そのものだった。そして浅川地区社会福祉協議会（社協）と月一回の情報交換会を始めたり、それをきっかけに私のためにスロープが用意されたりした。そんな関係が深まり、ある時、民生委員さんが「毎年小中学校の車椅子体験を手伝ってきているが、自分たち車椅子に乗ったことないんだよね。櫛田さん」と。「それじゃ、今度大人も車椅子体験を実際やってみましょうよ！まち歩きを！」すかさず口にした。胸がワクワクするのと同時にジワーと目頭が熱くなった。この地域に溶け込んできた幸せを感じた。

町歩きの日は顔なじみの方々ばかり二十名余。元気な高齢者が多かった。「こんなに道って傾いていると思わなかった！あれれ？まっすぐに進まないよ。けっこうきついよ！ちょっとした段差も大変だ。これは声かけて手伝わないかんな。今から練習しておかないといかんな、年だから・・・」真剣な表情の合間に笑顔が行きかう。こうして小中学校の車椅子体験を毎年手伝っている地域の方々が、自分たちも体験しサポーターとしてより具体的に学校と協力しあえる関係もできていった。

しばらくして私の職場に「車椅子で楽しむ高尾山」という研修案内がきた。飛び上がるほどうれしかった。町の中だけでなく、この町にある有名な高尾山で誰もが楽しめるためには、車椅子で登ってみてどんな配慮や手助けができるかみんなで考えようというものだった。

この高尾山のある町に長年住まわれている方々が、車椅子体験からこのような思いを抱かれたのだった。その少し前に、私はプライベートで介助者と一緒に電動車椅子で高尾山に登ってみた。その時、電動車椅子のバッテリーがかなり消耗してしまい困ったことを地区社協の方に話したことがあった。すると電動車椅子の充電器の設置が、個々のご厚意で茶店や駅や薬王院など、十二か所に無料で設置されることになった。ひとりひとりの優しさで。

この町の人々の繋がりや風土がたまらなく好きになった。仕事で高齢者の相談をしていると「昔は高尾山によく登ったものだ。今は不自由になった体だから無理だけど。」このような言葉もよく聞かれた。「私は孫と一緒に車椅子で薬王院にお参りに行けますよ、私もよく行っているから」と返したりもした。「認知症があっても家族や仲間と一緒に行こうよ」と誘ったこともあった。この土地ならではの繋がりの安心と信頼。研修の時は薬王院で昼食。座敷に赤い毛氈が敷かれお膳が並んでいる。ふと見ると私のお膳は四個積み上げてあった。車いすの高さに合わせてだ。皆さんが察して工夫をしてくださったのだった。

この愛情と工夫が忘れられなくて、私は小中学校の車椅子体験の時、毎年三十分間私の家族や障害のこと、そしてこの町を歩く時に感じることなどを伝える。そして、この高尾山の町のやさしさも必ず写真で紹介して自慢する。小中学生もみんなの親もこの町を作っている大切な人々だから。そして地域のおじいちゃんおばあちゃんまで毎年小中学生の車椅子体験を手伝っていること。この時間、この空間もやさしい地域そのもの。

私の話も七年経つと、母親の視点だけでなく、二歳の孫の話も加わるようになった。地域の皆さんとお互いの近況を話しながら、毎年の学校での車椅子体験は幸せな振り返りと、やさしい町の実感を再認識するひと時である。生徒たちからの感想も温かい。触れ合うこと、車椅子の体験を通じて、気が付くこと、できることがあること、勇気を持つことなどやさしい言葉がいつも並ぶ。そしてある時、こんな感想をもらい言葉に詰まった。

「櫛田さん、二十五年前怪我をした時、寂しかった娘さんたちにいっぱい接してあげてください」と。私が突然怪我をして重度障害者になった時、シングルマザーでもあったとみんなに語った。一・四・七歳の娘がいたと。

こんなやさしい生徒の気持ちをもらった幸せな私と、地域と共にこんなやさしい子供たちを大切に育てていく地域のやさしさもまた必要だと思った。

横浜に引っ越しても、職場を離れても、毎年この町から「車椅子体験」に必要とされることを感謝するばかりである。看護師であるとともに人の心のやさしさでコロナからお互いをいたわり守り合う社会になっていくことを願うばかりである。

選考委員特別賞

櫛田 美知子 さん

ワクチン接種を済ませた母に13年ぶりに会いに行ってきました。一人暮らしの90歳。突然予告せず驚かそうと5時間手動装置付きの車を琵琶湖に近い田舎の実家へ走らせました。末期がんでぎりぎりまで在宅サービスを利用して自宅で暮らした父の葬儀以来でした。母はデイサービスから戻ったところで、一人では外出は困難になり認知症も進みはじめていました。しかし庭の紫陽花を昔のように飾っていて、そして「看護師してるの？」と何回も繰り返し嬉しそうにききます。「そうよ！！！」と胸を張って笑顔で返しました。今回の受賞のお知らせを頂いた直後のことでした。母には「地域包括ケア」などという言葉は理解できないでしょう。しかし地域包括ケアの大切さを目の前にいる母の姿を通し感じるばかりでした。安堵と少しでも住み慣れたこの家で過ごせるよう祈る思いで戻りました。

私のかつての職場「地域包括支援センター高尾」での、毎年の小中学生の車椅子体験学習を町の人々も一緒に手伝っているエピソードを書かせていただきました。コロナ禍が長引く中、大切な人々と会えないでいる寂しさより、この町の人々の心の繋がりや世代を超えた思いやりが安心になっていることに気がつきました。これからも車椅子の視点も伝えながら看護師として高齢者が安心して暮らしていける地域作りに役立ちたいと思います。選考委員特別賞を頂き、ありがとうございました。